

ときめきリーフノベル

ときめきリーフノベル

文・高安義郎 絵・芝 章二



「簡単よ。褒めてやればいいの。男つて子供みたいで意外と単純なのよ」「子供?」
「そう子供。例えばね」
そう言つて自分の経験を得意げに話しだした。
「自分で買つて来たネクタイを、センスが良いって褒めたりとか、車の運転が上手だとか、食器洗いが丁寧だとを、私が作るより美味しいって褒めたる何度も作つてくれるようになつたのよ。それと子供のあやし方が上手だと言つたらね、一日中子供を見ていく

「でもうちの佑次さん 家では何もない人だから褒めようがないな。やることと言つたら毎晩ビールを飲むことくらい」
「それじゃあさ、佑次さん美味しそうにビール飲むわねって言つてみたらどうですか？」
「だからさ、きちつと一本で切り上げるんだから意志が強いわね、とか言つたりするのよ」
「そうか、そう言えばいいんだ」
「そう。男はみんな単純だから」それを見た香奈は自分も夫を褒めてみよ

「何言ってんだ。それを言ひたまじ
ろお前の方が男を見る目があつたつて
言いたいね。そんな冗談なんか言つて
ないで早くめしにしてくれ」
香奈は褒め言葉になつていなかつた
ことに気づき苦笑した。次の日の夕方
風呂から上がつてきた佑次の前にビー
ルを差し出した。

「おっ、気が利くねえ。君も一緒にど
うだい」佑次に誘われ二人で一本飲み
終えると、酒に弱い香奈は少しふらつ
いた。それを見た佑次は晩ご飯の片付
けを手伝つた。この時だとばかりに、
「片付けが上手ね。私よりずっと丁寧
だし」そう言つて褒めてみた。佑次は

プレゼント
9

「山桜」 高安 義郎 著

本誌にて執筆していただいている
高安義郎氏のリーフノベルが書籍と
なりました。

収録された
小説は全71
編のいずれも
読み応え十分
な内容で、福
屋書店とAma
zonで好評販
売中です。

亭主の操縦なんて簡単よ」
結婚して五年目の理恵が言つた。聞いていた香奈は結婚したばかりだ。夫同士が同じ職場の同僚だったことから理恵と香奈はよく長話ををするのだった。「最近佑次さん、ワンマンになつたようを感じるの。操縦つて、どうすればいいの」「里奈は身を乗り出して聞いた。
「簡単よ。褒めてやればいいの。男って子供みたいで意外と単純なのよ」「子供?」「そう子供。例えばね」

「理恵さんのご主人もともと料理上手なんですよ」
「とんでもない。最初のチャーハンなんかべとべとで猫だつて食へない代物だつたわ。子供のあやし方だつて危なつかしかつたんだから。でもね不思議なことに褒めてやるとだんだん旨くなるのよ」

「たって、あなた人を見る目があるから」何とか繕つた。
「人を見る目?なんだそれ」「だつて」「だつてなんだよ」
香奈は一瞬考え、「だつて結婚相手に私を選んだじやない」香奈は旨く褒めたと内心思つた。
だが、

「うちのはさ、褒めれば亭主は喜んで何でもすると思つてゐるらしい。見え透いてるぞつて言つたら傷つくだろうかんでやつてるけどさ。最近俺はあいつの褒め言葉は『ありがとう』の代わりだと思うことにしてるんだ」

「そうか、喜んでやればいいのか。女つて単純だなあ」

うと思ひたつた。家に帰ると何を褒めれば良いか探してみた。だがなかなか見つからない。そうこうしているうちに夕方になり夫が勤めから帰ってきた。

「お帰りなさい」

と声をかけたものの、何か褒める事はないか夫を見つめた。

「なんだ。どうかしたのかい」

佑次が聞いた。

「あなた、えらいわ」

とつさに適当に褒めてみた。

「何がさ」不思議そうな顔をした。香奈は言葉をつまらなくなが、

「ユウさん、新婚の味はどうだい」理恵の夫が聞いた。

「最近香奈の奴、変なんだ。やたらに褒めようとしている。後ろめたいことでもしてるんじゃないかって疑つちやうよ」佑次は答えた。

「うちの奴に吹き込まれたんじゃないのかな」

「次き入まんつて、何を?」

怪訝 けげん そんな顔をした

ひとりで悩まず相談しよう！青少年相談機関のご案内 ヤングテレホン 0120-783-497
http://www.police.pref.chiba.jp/window/center_act/ (千葉県警察少年センター)
お問い合わせについての相談に応じています。受付時間：午間6時の午前9時、午後5時まで

非行や虐待についての相談に応じています。受付は月～金曜日の午前9時～午後5時です。